

指示語「かの」の対比用法

——伊勢物語と土佐日記の類似性——

松 原 ひとみ

はじめに

指示語は、語り手も聞き手ともに了承する事柄に対して用いられることばで、本来新規の事柄には用いることはできない。文章中に、「この」や「その」という連体詞を伴う表現が現れば、読み手は必ずそれより前の文脈の情報を補いながら読み進めるにちがいない。しかし、遠称の指示語というものは少々特殊で、書き手と読み手が了承しているのであれば、両者の間で初めて話題にのぼる事柄に対しても用いることができる。有名な出来事や人物を指して「あの源平の合戦のとき……」、「かの源義経が……」というようにである。遠くを漠然と指し示す遠称の指示語は「この」や「その」よりも表現に幅を持たせることができるからであろうか、平安前期の散文作品に見られる用例を見ると、その用法は曖昧で、どう用いるかはある程度書き手の自由に委ねられていたのではないかという印象を受ける。そこで、本稿では『伊勢物語』と『土佐日記』を中心に「かの」の用例を收拾し、どのように用いられているかを整理してみた。

問題の所在

『伊勢物語』第二段には、新出の情報に対して「かの」が用いられる用例がある。

〈伊勢物語第二段〉

むかし、男ありけり。平城の京ははなれ、この京は人の家
まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、
世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさり
たりける。ひとりのみもあらざりけらし。それを、かのみめ
男、うちものがたらひて、かへりきて、いかが思ひけむ、時
は三月のついたち、雨そほふるにやりける。

起きもせず寝もせず夜をあかしては

春のものとながめ暮らしつ

本段では「むかし、男ありけり」と冒頭で提示された男を再び登場させる際に、「かの」を用いている。どこに問題があるのかというと、男の誠実さを表す「まめ」という箇所である。これは新たに加えられた情報であるにもかかわらず、あたかも読者の了承する事柄であるかのように「かのみめ男」と指示語

の中にひっくりめられている。後藤康文氏(1995)によると、注釈書では大きくわけて次の三つのように説明されている。^①

- (一)「かの」を直前の初段に関連付けて解こうとする
- (二)「かの」は同章段冒頭の「昔、男ありけり」を受ける言葉と判断する
- (三)「かの」は前文を受けるのではなく、享受者には先刻承知の前提としてある、おなじみの「昔男」像を指すとする

(一)は、かつて都のあつた春日の土地を訪れた男が、たまに唐突であるが、「伊勢物語が編まれた古今集編集前後には、ソードが描かれる前段をふまえた表現と考える。しかしながら、「いちはやきみやび」と評される初段の男の行動は「まめ」とはむしろ対照的ではないかと思う。(三)は、おなじみの有名な人物を指し示す用法である。清水好子氏(1974)は、「たしかに唐突であるが」「伊勢物語が編まれた古今集編集前後には、業平がすでに伝説化の途上にあつた人物なることを想起すべきである」という^②。しかし、本段冒頭で「むかし、男ありけり」とあえて読者に初出の人物として提示していたにもかかわらず、途中で急に「おなじみの昔男」もしくは「あの在原業平」のイメージを付与させて、周知の有名な人物に特定したとは考えがたいのではないか。また、後藤氏は、『伊勢物語』諸本を調査し、定家本配列の第百三段にある「むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり」を受けた表現

であると結論づける。かつての『伊勢物語』の配列では、「かのまめ男」は、「いとまめにじちようにて」の記述の後に位置していたが、「初冠本の成立にともなつて本来の脈絡を断ち切られてしまった」と考える説である。

章段配列の問題にまで話が及ぶとなると安易な判断はできないが、本稿では、(二)の立場を取りたい。第二段の冒頭で「むかし、男ありけり」と「男」を初出の人物として扱っている以上、本段を他の章段と関連付ける意見はすべて否定してよいのではないかと考えるからである。「かのまめ男」は単純に本段冒頭の「男」を受けた指示表現と考えるのが、一番シンプルで妥当な解釈ではないだろうか。その場合、「かの」は新規の情報まで含めて指し示していることになる。

同時代の散文作品から用例を收拾したところ、『土佐日記』に類似の用例を見つけた。

『土佐日記』の類似表現

『土佐日記』二月六日の条で「淡路」の老女という女性に対し「かの」が用いられていた。作中でこの女性が登場する箇所をすべて挙げると、次の三箇所が該当する。

〈土佐日記〉二月二十六日

この間に、風のよければ、楫取いたく誇りて、船に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きて、童も女も、いつしかと思へばにや有らむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路の専女と言ふ人の詠める歌、

追ひ風の吹きぬる時は

行く船のほて打ちてこそうれしかりけれ

とぞ。天気のことにつけてつつ折る。

〔土佐日記二月六日〕

六日。濡標のもとより出でて、難波に着きて、河尻に入る。皆人々、媼、翁、額に手を当てて喜ぶこと二つなし。かの船酔の淡路の島の大御、「都近くなりぬ」と言ふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞ言へる。

いつしかといぶせかりつる難波瀕

葦漕ぎそけて御船来にけり

いと思ひの外なる人の言へれば、人々あやしがる。これが中に、心地悩む船君、いたく愛でて、「船酔ひしたうべりし御顔には、似ずも有るかな。」と言ひける。

〔土佐日記二月七日〕

七日。今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み患ふ。船の上ることいと難し。かかる間に、船君の病者もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路専女の歌に愛でて、都誇りにもや有らむ、からくして、あやしき歌ひねり出だせり。その歌は、
来と来ては川上り路の水を浅み

船も我が身もなづむ今日かな

これは、病をすれば詠めるなるべし。一歌にことの飽かねば、今一つ、

疾くと思ふ船悩ますは我がために水の心の浅きなりけり

この歌は、都近く成りぬる喜びに耐へずして、言へるなるべ

し。淡路御の歌に劣れり。「ねたき。言はざらましものを。」と悔しがるうちに、夜になりて寝にけり。

一月二十六日の条で登場する「淡路」の老女は、二月六日に「かの船酔の淡路の島の大御」と船酔いの状態で再び登場する。『伊勢物語』同様、「船酔」という新規の情報まで含めて「かの」と指し示している。また「淡路」の老女は無名の人物であるため『伊勢物語』のように有名な人物をさししめす用法という解釈は成り立たない。

ところで、六日の条で船酔いの老女が歌を詠むと、「いと思ひの外なる人の言へれば、人々あやしがる」とあるように、周囲の人々は意外な人が歌を詠んだことをいぶかしく思う。これは、老女が歌を詠んだこと自体に対する反応ではない。人々は、酔っていたはずの人が優れた歌を詠んだことに対して「あやしがる」のだ。さらに、「これが中に、心地悩む船君、いたく愛でて、『船酔ひしたうべりし御顔には、似ずも有るかな』とあるように、船酔いに苦しむ「心地悩む船君」（＝貫之自身）は、船酔いをしているとは思えないほど素晴らしい彼女の歌を誰よりも絶賛している。老婆の歌に対する賞賛は翌日の日記にも繰り返される。「悩み患ふ。船の上ることいと難し」だという「船君の病者」（＝貫之自身）の状態は相当にひどかったはずだが、昨日の老婆の歌が素晴らしかったので、自分も歌を作ろうとする。一首では飽き足らず、二首目も詠むけれど、結局老婆の歌には劣ることをくやしがる。同じ船酔いの身である自分と老女を比べる、その対比の視点の中心に指示語「かの」が存在する。

これを踏まえて改めて『伊勢物語』第二段の「かのみめ男」を読み解くならば、男の誠実さを表す「まめ」とは、女の「ひとりのみもあらざりけらし」との対比の中で用いられた表現なのではないかという読みが成り立つ。独り身ではなかった女つまり、他にも通ってくる男がいた女性と、「まめ」な男とは対照的である。この対比により、最後の和歌に詠まれた男の切ない心情を一層引き立たせることに成功している。

「かの」を用いることで、読者は暗にそれとは対比的な「この」で称される存在を想定するのではないか。船酔いしているにもかかわらず優れた歌を詠む「かの」老女と、船酔いの身で歌が思うように作れない「この」自分自身（貫之）、一途に女性を愛する「かの」まめ男と、複数の男に思われる「この」女というように「かの」があれば自然と「この」との対比構造が浮かび上がる。

以下では、このような用い方を対比構造を強調する「かの」の対比用法と呼ぶこととする。

紀貫之の用例

紀貫之の散文体は、『土佐日記』以外では、『古今和歌集』の「仮名序」から知ることができる^③。「かの」の用例は、『土佐日記』には前述の一例を含めて全部で四例あり、「仮名序」に三例ある。「仮名序」の三例はいずれも「奈良の御時」を指す用例である。

〈古今和歌集仮名序〉

いにしへよりかく伝はるうちにも奈良の御時よりぞ広まりにける。かの御代や歌の心を知らしめしたりけむ。かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは君も人も身をあはせたりといふなるべし。(略)ここにいにしへのことをも歌の心をもしれる人わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ得たるどころ、得ぬところたがひになむある。かの御時よりこの方、年は百年あまり、世は十継になむ、なりにける。いにしへのことをも歌をも、知れる人よむ人多からず。今このことを言ふに、つかさ位高き人をば、たやすくやうなれば入れず。

これは、「この」で称される今の時代に対して百年あまりをへだてた奈良の御代を「かの」御時と用いる遠称の用法で、時間的な距離感にあわせて近称と遠称を使い分ける例である。

次は、阿倍仲麻呂の「あまのはら……」の歌が詠まれたときの逸話を伝える『土佐日記』一月二十日の二例で、唐土の人を指して「かの国人」と書き表している。

〈土佐日記一月二十日〉

(略) かうやうなるを見てや、昔、安倍仲麿と言ひける人は、唐に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、むまのはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずや有りけむ、二十日の夜の月出でるまでぞ有りける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麿の主、

「わが国にかかる歌をなむ、神代より神も詠むたび、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びも有り、悲しびも有る時には詠む。」とて、詠めりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かもとぞ詠めりける。かの国人、聞き知るましく思ほえたれども、ことの心を、男文字に、様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひの外になむ愛でける。唐とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにならむ。

「唐とこの国とは」とあることから、日本を「この国」、「唐」を「かの国」と空間的な距離感により指示語の使い分けをしていることがわかる。『古今和歌集』四〇六番歌「あまの原……」歌の左注も、同じ逸話を伝えている。ここでも、日本を指す「このくに」と「もろこし（唐土）」を指す「かのくに」の使い分けを確認できる。

『古今和歌集』四〇六番

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲磨

あまの原ふりさけ見れば

かすがなるみかさの山にいでし月かも

この歌は、むかしなまろこしにもものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへてえかへりまう

でござりけるを、このくにより又つかひまかりたりけるにたくひてまうできなむとていでたちけるに、めいしうといふ所のうみべにてかのくにの人むまのはなむけしけり、よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

唐土を指す例と奈良の御代を指す仮名序の例は、時間と空間の違いこそあれ、視点人物からの距離によって近称と遠称を区別している点で、同一の用法と考えてよいだろう。そして、それぞれ対比の対象が存在することから、根本的には前項で述べた対比用法と同じ発想であると考えてよいのではないだろうか。

『土佐日記』の残る一例は、十二月二十七日の条にある。十二月二十七日は門出して六日後、日記のはじめのほうである。この日、鹿兒の崎という所に、国の守の兄弟らが酒などを持ってお別れにやってくる。

〈土佐日記十二月二十七日〉

（略）また、或時には、或物と忘れつつなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりけると言ひける間に、鹿兒崎と言ふ所に、守の同胞、また異人、これかれ酒何と持て追ひ来て、磯に下り居て、別れ難きことを言ふ。守の館の人々の中に、この来たる人々ぞ、心有るやうには言はれほのめく。かく別れ難く言ひて、かの人々の口網ももちにて、この海辺にて、担ひ出だせる歌、

をしと思ふ人やとまるとあしがもの

うち群れてこそ我は来にけれ

と言ひて有りければ、いといたく愛でて、ゆく人の詠めりける、

棹させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな

と言ふ間に、楫取物の哀れも知らず、おのれし酒を食らひつれば、早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし。」と騒げば、船に乗りなむとす。

「かの」が指し示す「人々」は、直前では「この来たる人々」と近称の指示語で示されていたはずである。なぜ「この」から「かの」に切り替わっているのが不審である。

そこで、前述の淡路の老女で確認した対比用法をあてはめてみたい。ここでの「かの」は人々の歌を「いといたく愛でて」それに続けて歌を詠んだ「ゆく人」との対比を強調していると考えられる。「ゆく人」とは「この来たる人々」に見送られた人、つまり貫之自身のことを指す。淡路の老女と貫之のやりとり同様、見送りの「かの人々」の歌を聞いて「いといたく愛で」た貫之が今度は自ら歌を詠むというのだ。つまり、「かの人々」とあれば、近称の指示語がなくともそれに対する「この」貫之という対比関係が自ずと浮かび上がる対比用法と考えれば、指示語が転換する謎も説明できるのだ。

「かの」の対比用法

山本登朗氏(1988)は、『伊勢物語』第六十七段の「かの」

を例に、指示対象が「文脈上決して遠いところに位置してはいない」にもかかわらず「かの」の語で指し示めされる現象について考察を行っている^④。本段は、男が親しい者と連れだつて和泉の国に行き、生駒の山に雲がかかる様子を歌に詠む話である。歌は一行のうちの主人公の男が詠む。「かの」はその一行を指して用いられている。

〈伊勢物語第六十七段〉

むかし、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ二月ばかりに行きけり。河内の国、生駒の山を見れば、雲りみ晴れみ、たちある雲やまず。朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人のなかにただ一人よみける。

きのふ今日雲のたちまひ隠ろふは

花のはやしを憂しとなりけり

山本氏は、『古今和歌集』詞書で死者に用いる「かの」の用法があること等を根拠にし、「今」に身を置く語り手が「昔」の「男」を「遠い人物として、距離を置いて語っている」と分析する。

読者は、直前の文までを読みながら、無意識のうちに主人公たち一行の視線に、語り手とともに自らの視線を重ねあわせ、いわば彼らと一体化して旧暦二月の生駒山の雪景色に見とれている。その読者は、「かの行く人」の「かの」の語によつ

て、その場面からはるかに遠い「いま」「ここ」にいる語り手、そして語り手とともに「ここ」にいる自分たちの位置に気がかざるを得ない。物語の世界は、再び「昔」の位置に遠ざかるのである。その物語の世界の中で主人公は「ただ一人」歌を詠む。歌は、語り手や読者のいる「ここ」と物語の世界の間の距離を一挙に結び、遠称の遠さはかくして内面の広がりへと転換する。

山本氏の解釈では、「かの」までの文章を、物語内の人物とともに同じ視点で経験してきた読み手は、「かの」以後からは登場人物とは「時間的な」隔たりを持つことになる。

しかし、この説明では次のような用例を説明することはできない。『伊勢物語』三十九段の「かの至」は、時間的、空間的に直近の人物を「かの」で受ける例である。

《伊勢物語第三十九段》

むかし、西院の帝と申す帝おはしましけり。その帝のみこ、崇子と申すいまそかりけり。そのみこうせ給ひて、御葬の夜、その宮の隣なりける男、御葬見むとて、女車におひ乗りて出でたりけり。いと久しう率ていで奉らず。うち泣きて止みぬべかりける間に、天の下の色このみ、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄りきて、とかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりにて女の車に入れたりけるを、車なりける人、「この螢のともす火にや見ゆらむ、ともし消ちなむずる」とて、乗れる男のよめる。

出でて去なばかぎりなるべみともしけち

年経ぬるかとなく声を聞け

かの至返し、

いとあはれなくぞ聞ゆるともしけち

消ゆるものとも我は知らずな

同じ文の前の方での「源の至といふ人」という扱い方から、「源の至といふ人」以下を見ていくと有名な人物を指す用法とは考えがたい。「源の至」という人で、この人も、見物していたのだが、この車を女車だなど見て、そばに寄ってきて、なにかと色めかしいそぶりをするあいだに、かの至は、螢をとって女の車に入れたのだが、車にいた人は……と続く。同一の文中で、まさに話題の中心にしていた人物をいきなり「かの」と指し示す珍しい例である。これについても、「至」よりも先に歌を詠んだ「乗れる男」との対比の中で用いたと考えればわかりやすい。亡くなつた皇女の命を螢の明かりに喩え、明かりを消してこの世から消えた命を悼みなさいという「この男」と、明かりが消えて皇女の命がこの世から消えるとは自分は思わないと応じる「かの至」の和歌は対照的で、その対比構造はやはり「かの」があるからこそ鮮やかに浮かび上がるのである。

前の第六十七段の「かのゆく人」についてはいわずもがなである。「かの行く人のなかにただ一人よみける」は、複数の仲間のうちから主人公の男一人を取り立てる書き方である。「かの」人々は歌を詠まなかったが、「この」男は歌を詠んだという対比と考えるのが妥当な読みではないか。

おわりに

『伊勢物語』中の「かの」には様々な解釈がなされてきたが、遠称の指示語としての用法も、新出事項に用いる用法も、また直近の対象を指示する用法もいずれも対比用法と捉えることができる。そして、新出事項に用いる用法と、直近の対象を指す用法は、「かの」と対になっていて隠れた「この」の存在を読み取ることで、従来の解釈では見落としかちであった物語の対比構造をより明確に読み解けることがわかった。このような特殊な「かの」の用法が『伊勢物語』と『土佐日記』に共通して見られたことから、両者に共通の執筆者が存在する可能性も指摘できる。

①後藤康文「『伊勢物語』第二段の『かの』」『国語国文研究』99巻、pp.1-10, 1995.3

②清水好子「物語の文体」(『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会、1980, p.16、論文の初出は『国語国文』18巻4号、1974.9)

③他の散文資料として私家集『貫之集』と『古今和歌集』の詞書部分が考えられるが、多くの異本を持つ『貫之集』は自撰本と他撰本とがともに存在すると考えられているため扱いが難しく、また『古今和歌集』についても五人の撰者が関わっているため資料として弱い。

④山本登朗「『かの』—伊勢物語の遠近法—」『国語国文』57巻6号、pp.1-20, 1988.9

(聖和女子学院中学校高等学校 平成二十七年修了生)